

本学の母性看護学実習展開について

— 母性看護学実習の今後の課題 —

瀧 川 由 美 子

はじめに

本学でも平成11年度進学課程の新カリキュラムの導入により、教育内容の変革に応じた講義と臨床実習の教育内容の整備の検討をしてきた。カリキュラム変更後、本学の母性看護学実習形態に大幅な変更はなかったが、現在の社会構造の変化や出生率の低下に伴い、身近に妊産婦や新生児、妊婦との家族とのかかわりに接する機会が減少した青年期の学生においては母性看護学実習での学習が困難になってきている。¹⁾ また、少産少子の現代では、分娩の減少による実習施設の確保が困難なため、母性看護学実習自体の形態の変容を余儀なくされる現状もある。しかし、母性看護学実習においては他の看護学実習と同様、臨地実習での実習展開は実際の妊産婦とのかかわりや、初めての新生児との触れ合いで看護技術の習得を学習する唯一の機会とも考えられる。今回は、母性看護学実習の学生の意識について検討し²⁾、報告した。

そこで今回は、上記の社会的現状をふまえて本学の最近の母性看護学実習の実際と問題点について検討し、今後の母性看護学実習の展開のありかたについて示唆を得たのでここに報告する。

I. 母性看護学実習までのレディネス

母性看護学実習までに学生は1回生時に母性看護学概論、母性看護学方法論Ⅰ、2回生時に看護記録展開や母性看護学技術演習を含んだ母性看護学方法論Ⅱの単位を修得する。(表1～3) 講義内容は表1の通りであるが、特に母性看護学方法論Ⅱでの看護展開の演習と母性看護技術演習は、カリキュラム上の問題もあるが、実習直前に行うよう設定している。中でも母性看護学での机上の事例展開と沐浴演習・妊婦健診での演習はグループ毎の小人数で行うことでひとりひとりの技術の取得や理解に努めている。

表1 母性看護学概論(1単位15時間)

授業内容・計画
1. 母性概念について
2. 女性のライフサイクルとその発達課題について
3. 母性看護の対象について
4. 生殖に関する解剖生理・内分泌の変化について
5. 母性意識の発達と母子相互作用について
6. 母性看護の目的と看護婦の役割について
7. わが国の母性保健の現状と動向・今後の対策について

表2 母性看護学方法論Ⅰ（1単位 45時間）

授業内容・計画
1. 母性各期における特徴とその看護
2. 妊娠期の生理と正常妊娠経過
3. 妊娠期（ハイリスク妊娠も含む）の看護
4. 正常分娩の生理と機序
5. 分娩の経過と分娩期の看護
6. 異常分娩と看護
7. 正常産褥経過と産褥期の看護
8. 異常産褥経過と看護
9. 新生児の生理と特徴
10. 新生児期の看護
11. 母子関係確立への援助

表3 母性看護学方法論Ⅱ（1単位 30時間）

授業内容・計画
1. 妊娠期の妊婦に対する看護技術について （妊婦健康診査の技術・保健指導等）
2. 分娩期の産婦に対する看護技術について （呼吸法・リラックス法の指導）
3. 産褥期の褥婦に対する看護技術について
4. 新生児に対する看護技術について（新生児の観察と沐浴等の演習）
5. 妊娠期・分娩期・産褥期の看護過程の展開
6. 産褥期の保健指導（沐浴指導・退院指導等）
7. 母性各期における保健指導技術について
8. グループ発表 （看護過程の展開及び保健指導案の作成）

Ⅱ. 母性看護学実習の目標と実習方法

1. 実習目的・目標と実習方法

前回は報告したように本学の臨地実習期間は2年生の後期から実施し、全実習で14週間実施する。そのなかで母性看護学実習は2週間実施している。以下の表4・表5に実習目的・目標、実習方法について示した。

表4 母性看護学実習目的・目標（2単位 90時間）

<p>< 目的 ></p> <p>妊娠、分娩、産褥期の母性各期の変化や健康のレベルによる対象の特徴をふまえて、看護過程の展開を行ううえで必要な原理と技法が理解できる。</p> <p>< 目標 ></p> <p>① 妊娠成立、妊娠経過を理解し、適切な判断、看護援助について学ぶ。</p> <p>② 分娩経過を理解し、適切な判断、看護援助について学ぶ。</p> <p>③ 産褥経過を理解し、適切な判断、看護援助または、保健指導について学ぶ。</p> <p>④ 新生児の体外生活の適応の生理的特徴を理解し、経過に応じた看護援助について学ぶ。</p> <p>⑤ 母子関係の成立と母子及び家族に教育的援助について学ぶ。</p> <p>⑥ 生命誕生への共感的態度、畏敬の念を学ぶ。</p> <p>⑦ 母子の生活を援助するために地域社会や地域関連機関との連携の必要性の理解を深める。</p>
--

表5 実習方法

＜ 実習方法 ＞

1. 実習期間は2週間。
2. 実習期間中、原則として1～2例を受け持つ。
3. 受け持ちは原則として褥婦を受け持つが、分娩期（産婦）から受け持つ場合もある。
4. 受け持ちを通して母子（新生児）両面からのケアを学ぶ。
5. 受け持ち外でも分娩見学や保健指導の見学は積極的に行う。
6. 受け持ちを通して実際に保健指導技術を学ぶ。

Ⅲ. 母性看護学実習の実習内容について

1. 受け持ち主体による実習

実習期間中は、1～2名の受け持ちを持ち、対象の看護展開・看護技術を学んでいくことを中心に実習展開を行っている。母性看護技術は受け持ちを通して、妊娠、分娩、産褥期の看護を実際に行うことが中心となる。（表5）

2. 看護過程の展開の学習（実習記録）

看護過程の展開の学習は前記したように、実習前に最低1例の受け持ちを持ち、母性対象の事例展開を各自行っている。本学では薄井氏の科学的看護における看護過程の展開を学生に指導している。ただし、母性看護学実習では健康な対象を受け持っているため、看護過程の展開の方法は多少、母性特有に変容させて展開している。（表6）

3. 具体的な母性看護学実習内容

対象の特徴から、看護者が行う看護場面より、対象の妊産褥自身のセルフケア場面が多い。そのため、受け持ち以外の実習内容を学生に積極的に実施させている。実施内容として主なものは表7の通りである。（表7）

表6 看護過程の展開例

看護の方向性（例）

＜ 褥 婦 ＞

1. 貧血状態や妊娠中毒症が改善され、会陰切開創からの感染が予防でき、正常な産褥経過を辿ることができる。
2. 乳頭扁平等の乳房・乳頭の手当てを行い、母乳栄養分泌の促進を促す。
3. 育児技術の習得を促すことで初産婦であるための育児に対する不安を除去し、母子関係の確立を促す。

＜ 新生児 ＞

1. 胎外生活に適應でき、感染などの異常が起こらない。
2. 生理的な変化の逸脱がおこらず順調に成長する。
3. 十分な母乳栄養が摂取でき、児の愛着形成を促進させて母子関係確立ができる。

表7 母性看護学実習内容（受持ち時も含む）

- 1) 外来実習（見学を含む）
 - 妊娠週数の判断
 - 妊婦計測（腹囲・子宮底）
 - レオポルド触診法
 - 超音波検査法
 - 胎児心音の聴取
 - 外来での妊婦への保健指導
 - 内診・肛門診の介助
 - 骨盤外計測
 - 妊娠反応検査の実施
 - 尿検査の実施
 - 婦人科細胞診
 - 人工妊娠中絶の介助の見学
- 2) 病棟実習（見学を含む）
 - ①妊娠期の看護
 - 分娩監視装置の装着（分娩期も）
 - 切迫流産の看護
 - ②分娩期の看護
 - 入院時の問診
 - 入院時の処置（浣腸・座薬挿入・更衣）
 - 入院時の観察（子宮底・腹囲測定など）
 - 分娩第1・2期の観察（一般状態・陣痛・児心音の観察）
 - 分娩期の内診（頸管成熟度）
 - 分娩期第1期・2期の看護（清拭・食事介助・排泄の介助）
 - 分娩の見学（分娩場面）
 - 胎盤計測
 - ③産褥期の看護
 - 褥婦の子宮復古の観察
 - 褥婦の一般状態の観察
 - 褥婦の退院診察・抜糸時の観察
 - 乳房の観察
 - 乳房マッサージ（SMC）・搾乳などの指導
 - 産褥体操
 - ④新生児期の看護
 - 出生直後の新生児の処置・計測
 - 新生児の観察
 - 沐浴
 - 新生児のオムツ交換などの育児技術
 - 授乳の見学
 - ⑤保健指導
 - 保健指導 沐浴指導（集団・個別）
 - 保健指導 退院指導（集団・個別）
 - 保健指導 育児指導（集団・個別）
 - 保健指導 調乳指導（集団・個別）
 - 保健指導 母親学級
 - 母子健康手帳・出生証明書

4. 平成13年度母性看護学実習内容

1) 母性看護学実習対象の学生

母性看護学実習対象の学生の全人数は平成13年度は、80名であった。母性看護学実習病院は、5病院にわたり、グループは成人・老年看護学実習同様の3人～4人で編成した。

2) 母性看護学実習での受持ち対象者

母性看護学実習での対象者は、健康な対象者である妊産褥婦とした。実習状況にもよるが、1例～2例を受け持ち、対象者の生理的变化を学び、看護過程を展開すると同時に、看護の実践につなげていった。対象は状態の変化が早い特殊性があり、家族をも対称とした看護が重要という特徴があった。

3) 母性看護学実習の時期と期間（時間数）

実習期間は平成13年9月中旬～14年1月末までであった。実習方法表4の通り、2週間の期間（90時間）の実習であった。母性看護学実習の時期は対象の特殊性や母性看護学実習内容自体の特殊性を考えると、ある程度他の病棟実習を終えた段階が望ましいとされている。しかし、本学も他学同様、少産の現代社会では実習場が得がたい関係から実習開始の段階から母性看護学実習を組み入れているのが現状である。

4) 母性看護学実習実施の病院とその相違点

他の科目の実習展開の関係と1つの病院で受け入れていただく学生数の限界との関係で、複数の実習病院で母性看護学実習を行っている。平成13年度の母性看護学実習を行った主な4病院について実習内容の相違点を示した。（表8）

表8 母性看護学実習における各病院別相違点

	A 病院	B 病院	C 病院	D 病院
母児異室・同室	母児異室制	母児同室制	母児同室制	母児異室制
受け持ち開始時期	受け持ちがあれば実習初日から受け持つ	受け持ちがあれば実習初日から受け持つ	受け持ちがあれば実習初日から受け持つ	1週目終了から2週目に受け持つ
実習内容	受け持ちを中心にしながら2週間にわたり、外来実習・その他の処置や母性看護技術・保健指導の見学の実施	受け持ちを中心にしながら2週間にわたり、外来実習・その他の処置や母性看護技術・保健指導の見学の実施	受け持ちを中心にしながら2週間にわたり、外来実習・その他の処置や母性看護技術・保健指導の見学の実施	1週目は他の処置や母性看護技術・保健指導の見学の実施 2週目以降受け持ち中心の実習
保健指導の実施	学習到達度にあわせて、受け持ちに対しての個別指導の実施	全員の学生が受け持ちに対しての個別指導	2週目に沐浴集団指導	学習到達度にあわせて、受け持ちに対しての個別指導の実施
カンファレンス	学生主体で適宜1週目に中間カンファレンス	学生主体で適宜1週目に中間カンファレンス	学生主体で適宜1週目に中間カンファレンス	学生主体で適宜1週目に中間カンファレンス

表8のように各病院ごとで、病院側の指導内容に相違点がみられることがわかる。特に対象者への保健指導の実施については、全員実施させていただいている病院もあれば、学習の到達度が高い学生のみの実施となる病院の場合があり、各差がでているのが現状である。そのため実習全体の母性看護学実習の目的や到達目標に差がでないように各教員が留意し、実習指導を行う必要があった。

5) 平成13年度の母性看護学実習終了後の学生の意識 (抜粋)

毎年、実習終了後に、実習についてアンケート調査を行っている。そのなかでいくつかの結果を抜粋した。

① 実習中に一番困ったこと

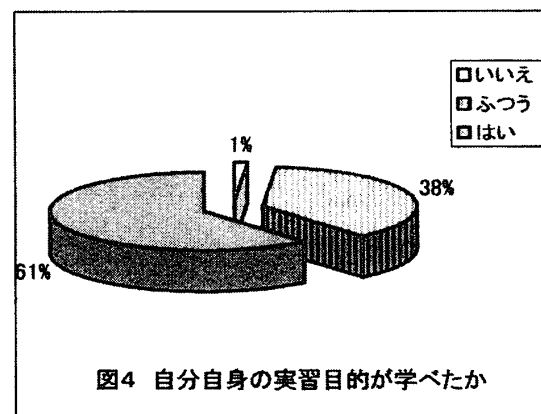
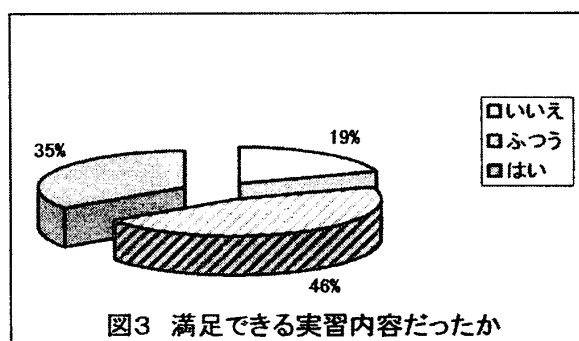
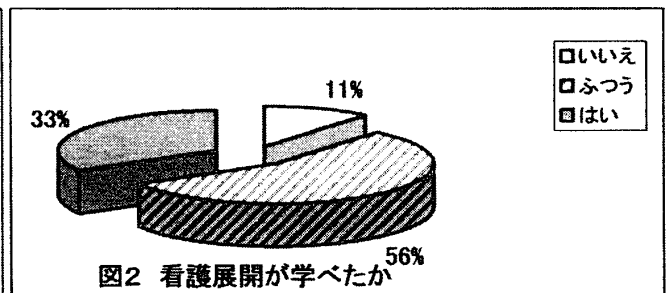
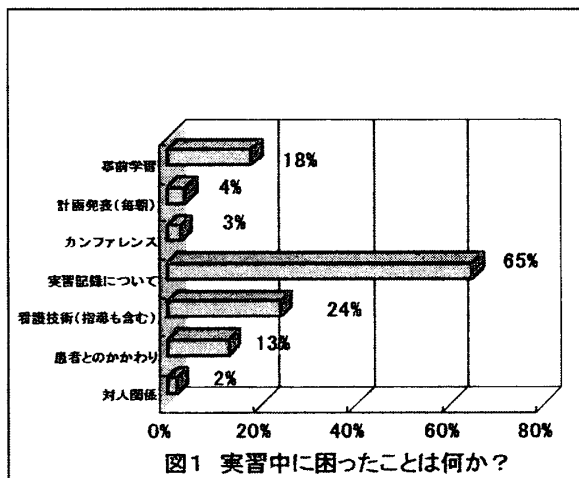
一番困ったことは、実習記録が65%とであり、次に看護技術24%、患者とのかかわりの13%順であった。(図1)

② 看護展開について

学生自身の母性看護学実習での看護展開が学べたかどうかでは、はいが33%、ふつうが56%、いいえが11%であった。全体的には看護展開がほぼ学べた結果になった。(図2)

③ 実習の満足感

満足した実習であったかどうかは、はいは、35%、ふつうが46%、いいえが19%であった。(図3)



④ 自分自身の実習目的達成度

自分自身での実習目的を学べたかについては、はいが61%、ふつうが38%で6割のものが達成できたと考えていた。いいえは1%のみであった。(図4)

⑤ 自由記載内容

学生の母性看護学実習による看護のまとめに以下のような記載内容が見られた。

- ・ 産科病棟で実習してみて一番感じたことは、他の病棟との違いである。特に大きな病気を抱えているわけではないが、個々の個別性を考えた援助が何なのかわからなかった。しかし、受け持ちを持たせていただいていた実習させていただき、産褥経過がどんどん変化していくなかで産褥日数に合わせた援助や経過の観察をしながら看護を提供していく必要性を学びました。
- ・ 今回の実習で集団指導として沐浴指導行ったり、指導の見学をさせていただいたが、母親には退院後の育児の責任が全てふり掛かってくるので育児不安やわからないことのための保健指導は大変重要なことがわかった。また、それらをサポートできる環境を作ることが大切なことも学びました。
- ・ 新生児室では苦痛や異常を訴えることができないので、急変しやすい児の観察を行うことで異常の予防が重要であると学んだ。また、学校では経験することができなかったレオポルド触診法や分娩監視装置の装着、胎盤計測などができ、貴重な産科特有の経験ができました。
- ・ 初めての分娩見学では、分娩前後の母親の気持ちや表情の変化に驚き、分娩を終えた褥婦さんが見せてくれた美しい笑顔は一生忘れられないものになると感じた。そして何よりも生命誕生の素晴らしさや、命を尊ぶことを学ぶことができ、今後の臨床看護にもいかしていきたいと思います。

IV. 今後の母性看護学実習の課題

わが国では少子、高齢社会、医療の行動化、生命科学の進歩などにより、女性を取り巻く環境も変化し、子を産み、育てる価値観は多様化している。そこで現代の母性看護学では以前の生殖期を中心とした学習ではなく、女性のライフサイクル全体を視野にいった新カリキュラムの構築がされている。その中で、母性看護学実習は母性看護学での既習の知識・技術を実際の看護場面で体験し、学習することで看護の実践能力を習得することができるといえる。しかし、これらの社会背景から考え、今後は本学の母性看護学実習の展開についても様々な課題が考えられる。

次に、母性看護学実習における課題を考える前に今まで述べてきた本学の母性看護学実習の現状についてまず、触れてみたい。本学の母性看護学実習は本学が進学課程であるため、2週間の実習という限られた期間での実習となっている。また、本学の特徴として他の科目の実習場所と同様、母性看護学実習病院も複数の(4~5箇所以上)に及ぶという特徴がある。また、先に述べたように、病院間で具体的な実習内容の相違が見られることから、学生間で実習目標到達度の差異が考えられる。今回、平成13年度の実習終了後アンケートの結果を示した。全体的には半数以上の学生が、実習に満足しており、目的を達成したという認識を持っていた。しかし、各病院の結果については省略したが実習内容の相違による学生の満足度の格差は否めないといえよう。また、学生たちは、受け持ちの対象者が褥婦ということ

で5日間～6日間の短いかかわりの中で、生理的にも、精神面にも母児とも急激に変化する様子を学び、2週間という短い実習期間でその学びを統合させていく必要がある。そのため学生にとっては実習期間中の大変なストレスが考えられる。以上のことから、母性看護学実習の展開において今後どのようなことが課題になるかを考えてみたい。

まず、実習までには、1回生時からの母性看護学の講義と実習前の事前学習で知識の習得を促しているが、今後は、その過程でいかに母性看護学実習で実際に学ぶ内容についてイメージ化させて学生のレディネスをはかることが課題である。このことが最終的には、限られた実習環境や期間で効果的に知識と看護の実践を統合化をはかることになると考える。また、今後も社会的環境の変化により、学生たちが身近に妊産褥婦や、新生児、子どもにかかわる機会の減少は否めない。結果的には、母性看護学実習はこれらの青年期の学生たちに自分自身の母性としての役割、認識の発達も促す貴重な機会になっているともいえる。伊藤は⁴⁾、「母性看護学実習は、分娩見学や妊娠・産婦褥婦に対する関わり、新生児のケアを通して、妊婦・産婦・褥婦に対する看護を学ぶとともに、生命への畏敬や感動、母親になる苦痛と喜びなどに実感すること、また新生児を積極的・肯定的に受け入れるように変容し、自分自身の母性に気づき見つめるという学習の機会となっている。」と述べている。これらのことから、学生指導のなかで各学生の母性意識を含めたかかわりも念頭に置き、効果的な実習方法を検討していく必要がある。また昨年度の学生たちの看護のまとめより、山田ら⁵⁾が述べているように学生たちは、生命の尊厳・神秘さや母親としての責任と役割、保健指導の重要性、継続看護の重要性や生命誕生のすばらしさ、などを学習していた。また、産褥・新生児期の母親や新生児にかかわり基本的な生理や看護についても学ぶという実習目標についても殆どの学生が学べたと述べている。学生たちにとっては様々な実習環境であるが、母性看護学実習で実際に体験することで初めて、イメージ化できたり、感動したり、ひとりの女性としての母性という感性をも刺激を受けていることが伺える。これらのことから、今まで述べてきたように、様々な母性看護学実習の今後の課題はあるが、学生のレディネスを考慮しながら、貴重な実習の機会を大切にすることが重要であると考え。そして、母性看護の教育内容の本質を検討していき、学生たちがいかに看護の基礎教育のなかでの重要な学びの機会を得ることができるかを第1に考えて今後の母性看護学実習のあり方について検討していきたい。

VI. おわりに

今回は現在の本学の母性看護学実習の実際をふりかえり、今後の母性看護学実習のあり方を検討した。現代の社会環境の変化のなかで、様々な母性看護学実習の教育内容で課題をかかえていることがわかった。今後は個々の学生の特性に合わせた母性看護学実習の指導を行うためにも、具体的な学生への母性看護学実習での指導場面なども検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 矢本美子：母性看護の臨床実習 3年課程（短大）の例 実習をとおして看護観を深める，看護展望，16（2）1991
- 2) 瀧川由美子：母性看護学実習に対する学生意識について～実習前後を通して考える～，奈良文化女子短期大学 紀要 第31巻，2000
- 3) 薄井担子：改定版 科学的看護論，日本看護協会出版会，1986
- 4) 伊藤道子：母性看護実習が看護学生の母性意識の発達に与える影響，母性衛生，38（1），1997
- 5) 「看護教育」編集室編：NO. 10母性看護学 カリキュラム案とその展開，医学書院，1996
- 6) 中村和代：看護学生のストレスに関する要因分析 ストレス認知・対処方法の学年比較，看護教育，37（3），1996
- 7) 渡部尚子：母性看護学実習論，助産婦雑誌，46（6），1992
- 8) 竹ノ内ケイ子：母性看護学実習で学生が自覚するストレスの状態，日本助産学会誌，7（1），1993